

第 31 話 赤穂四十七士の吉良邸討ち入り物語にはヒミツ満載

ときは元禄 15 年 12 月 14 日、前夜の雪をザックザックとけちらして、ゆくは本所松坂町。大石内蔵助^{くらのすけ}たち赤穂四十七士が吉良上野介^{きらくずけのすけ}の屋敷に怒濤のごとく討ち入ったり。戦うこと 1 刻あまり、みごとに吉良の白髪首を討ちとるや、めざすは殿のおわす芝高輪の泉岳寺。

師走になると「忠臣蔵」の季節を感じる人が多いでしょうが、この物語には不思議がたっぷりあるのです。舞台からして播州赤穂、山科、遊女町の祇園^{ぎおん}や撞木町^{しゅもく}、それに江戸ですが、天下の台所だった大坂がでてこない。きつとなにか恐ろしい秘密がかくされている……のかも。

筋書きは赤穂浅野家の若殿が江戸城松之廊下で吉良に斬りかかり御家断絶、320 人の家臣は即日解雇という倒産物語ですが、人間の気持なんて今も昔も同じこと。若社長が恥をかかされて乱心したとして、社員 47 人で仇討ちなんて、あなた参加しますか？江戸時代でも討ちいった例はほかにはないのです。

もっと素朴な疑問。大石が祇園や撞木町で遊蕩にあけくれた金はどこから湧いてでたのでしょうか。1 千 500 石の家老といっても、実際は半知(半分を返上)の半知のまた半知。赤穂藩は城という箱モノに金をかけすぎて藩札を乱発して、最後は 6 割返却で勘弁してもらい、城内の家具まで売って退職金(分配金)にあてています。それすら大石はうけとらず、退職金も年金も失業保険もなしで祇園を遊び狂ったわけですから、ぜひその極意をおしえてほしい。

小なりとはいえ軍隊の軍事行動ですから軍資金が結果を左右します。当時の江戸の町には木戸が 5 千カ所もあって、木戸番や辻番が夜の 10 時から翌朝まで猫の子一匹とおさない。そこを戦闘服の 47 人が夜中の 3 時すぎに吉良邸まで行軍しているのです。火事装束に似せていたとしても、半鐘は鳴らず煙もみえず、なによりも大刀を腰に弓や槍、薙刀をかかえた消防士なんて、いるとおもいますか？

もっと大きな疑問は、赤穂浪士が討ち入ったとき吉良邸には 150 人もの侍がいたことです。赤穂側は老人と年少の者をのぞく実践部隊は 30 人。戦闘の結果は、吉良側の死者 17 人、重軽傷者 23 人、逃げ出した者が 10 人で、なんと 100 人もの用心棒たちが同じ吉良邸内の長屋から一歩もでてこないのです。

疑問は山とあるのですが、もしも、お米屋さんの豪商「淀屋」が赤穂のスポンサーだったなら、……少しは秘密がみえてきたでしょ。えっ、無理にこじつけて、へ理屈をいうのかですって？とんでもございません。

第 32 話「忠臣蔵」の成功の裏に先物マーケットをつかった資産運用があったとしたら

大石内蔵助^{おおいしくらのすけ}が退職金も年金も失業保険もなしで、祇園や撞木町で遊び狂ったこと。小なりとはいえ 47 人の部隊を維持した軍費。吉良邸の 150 人の武士にたいして、実働部隊 30 人の赤穂がどうやって勝てたのかなど「忠臣蔵」には不思議がいっぱいですね。

資金は、大坂で塩を売った金という説がありますが、井池筋に 10 名の塩問屋はいてもセリ市などなく、高値で売り抜けて懐にズシリなんて無理。吉良との遺恨は塩が原因というのも真ッ赤なウソ。赤穂は 5 万 3 千石で塩田 224 町歩。吉良は全部でもたったの 4 千 2 百石で塩田は 20 町歩。これでは争いようがありません。

物語に大坂がでてこないのは書けなかったからだという仮説をたててみました。強引ですが「忠臣蔵は浪花商人がプロデュースした壮大なドラマ」だった、という大胆な推理です。これだと土農工商の最下位の援助で主君の仇を討ったことになり、武士道的美談ではなく幕府が認めるわけがない。つまり大坂を消した。

この場合の商人の条件は、忠臣蔵を裏から演出できる力と獄門磔獄の覚悟です。この条件を満たすのは「豪商淀屋」しかありません。では、どこで赤穂と淀屋とがむすびつづくのか。

大石家初代の大石良勝は、幼いころ石清水八幡宮^{いわしみず たっちゅう}塔頭の宮本坊で修行していて、僧侶がいやで浅野家に仕官。大坂の役で敵の首をあげて国家老になっています。曾孫の大石内蔵助が家老となったとき、弟の専貞はその縁で同じ塔頭の大西坊の住職となり、さらに弟さんが亡くなると大石は養子にあとをつがせているのです。

一方の淀屋は徳川家康から石清水八幡宮の侍格と田畑 300 石を永代安堵された代々の本頭^{ほんがしら}神人^{しんじん}、氏子^{うじこ}代表です。つまり大スポンサーの淀屋と、弟と養子を住職にした大石家当主の内蔵助……。どうです、結びついたでしょ。

大石たちが切腹(1703 年)になると、幕府は淀屋にのりこみ、宝永 2 年(1705)に財産没収、所払いにします。そのときの大名貸し残高だけで現在の 100 兆円、国家予算を超えているのですから、祇園などそっくり買えます。もちろん大石も武士のはしくれ、金を恵んでもらうはずはなく、世界で最初の先物マーケット「堂島米市場」で正々堂々と儲けた。市場を裏で牛耳っていたのは淀屋……。現代の堀江モンや村上ファンドとオーバー・ラップしませんか。

夜中は猫の子一匹とおさない江戸の木戸もワイロひとつで自動ドアになるでしょうし、吉良の雇われ用心棒 100 人が部屋からでてこない理由も想像できますよね。

淀屋はそれまで幕府から狙われていて死に体でしたから、赤穂浪士討ち入りで江戸が大騒動になる……に賭けたのかも。だからこそ歴史から完全に抹殺されたのだ。と、無責任な作家は想像をたくましくしているのです。

第 33 話 暴れん坊將軍徳川吉宗の落馬

三代將軍家光の時代まで 1 石 (150 kg) あたり銀 20 匁〜30 匁で推移した米価は、承応年間には 35 匁、万治 3 年 (1660) に 50 匁を超え、元禄時代に入ると 100 匁と江戸初期の 5 倍もの高値になります。狂乱物価はお米屋さんのせいだと、宝永 2 年 (1705)、ついに (ほかにも理由はありますが) 豪商淀屋は關所のうえ財産没収、所払いになってしまいました。

さすがに米価への影響は大きく半値以下の 41 匁にまで急落しますが、効果は長くは続かず高値を抜いてきました。原因は、財政に行き詰まっていた幕府が、翌宝永 3 年に銀の品位が 50% という通貨改悪をしたことです。インフレの最中にマネー・サプライ (通貨供給量) を膨張させたのですからたまりません。翌年の富士山大爆発をきっかけに米価は 120 匁という記録的な高値になり、そこから 80 匁前後を大きく振れながら享保年間に至ります。

享保元年 (1716) に紀州藩主から八代將軍になった徳川吉宗は、物価を下げることに腐心します。疲弊した幕府財政を建て直すために質素儉約をむねとし、百姓には粟や稗を食べるように命じ、同時に武蔵野新田などの開拓によって耕地面積を拓げて米の増収をめざしたのです。

これが「享保の改革」で、土地永代売買禁止令などもあって、米価は 65 匁に下がりましたが、翌年の淀川の氾濫と摂河の大洪水で 75 匁に反騰。一時は下げたものの、5 年に入ると 68 匁、6 年には 80 匁に高騰したのですから吉宗の怒りは頂点に達してしまいました。米価が高いのは米屋が悪いからだと言米仲買人 67 名を召し捕り、翌年に更に 34 人も逮捕するという強引な価格政策にでたのです。効果はできず、さすがの米価もじりじりと下がり、とうとう 40 匁を割り込んできました。

まさに八代將軍吉宗の作戦勝ちだったのですが、実はとんでもない成り行きになって慌てふためきます。米本位制の幕藩体制だから無理やり下げたのですが他の商品が下がらない。おコメの値段よりも肥料 (金肥) の方が高くなってしまった。これを「米価安の諸色高」といいますが、武士の収入は年貢や知行米などコメだったため、給料が 3 分の 1 に減り、塗炭の苦しみが襲いかかります。傘張りや内職で糊口を潤す武士や、借金を元利とも踏み倒す大名まであらわれました。新田開発で増産を図り、儉約と節約でおコメを食べないのですから余るのは当然です。得意のコメ政策から落馬したようなもので、万策尽きた吉宗は高騰の主犯だと規制してきた先物取引を 180 度見直さざるを得なくなったのです。

第 34 話 南町奉行大岡越前守は男でござる

八代将軍吉宗のもとで米価は大暴落しました。徴税も米納ですから幕府財政は窮地におちいります。物価を下げることに腐心してきた吉宗の六尺豊かな体軀が歯がみする思いだったでしょう。だがさすが徳川幕府中興の祖。米市を禁止し制限を加えたから下落したのなら、逆に規制を緩和すれば高くなると考えたのですから、なんと単細胞の将軍さまです。

享保 8 年(1722)に千石以内の延べ取引を許し、9 年には不実商い(先物)を黙認すると言いはじめ、10 年に江戸商人の紀伊国屋源兵衛たちが幕府に請願してきたからという理由で、それまで極刑でぞんだ先物取引所の設立を認めます。いかにも規制緩和、市場経済を容認したようですが、大坂の米市を公儀の管理下におく狙いが見え隠れしていました。そうと知った浪速商人たちは幕府のヒモ付き米市など受け入れず、高い口銭を理由に誰も使わないため 1 年後の享保 11 年暮れに閉鎖。

享保 12 年 2 月、やはり江戸の中川清三郎など 3 人に堂島永来町に米会所を許可するのでから懲りていません。この処置に対して米仲買 604 名連名による廃止願書で大坂の窮状を説いて直訴し、最後は大岡越前守の決済で享保 13 年 2 月をもってあえなく解散。

14 年になって 30 匁割れという百年ぶりの暴落にうろたえた幕府は、江戸小網町に米延売切手売相場会所を許可。大坂にも 15 年 5 月、またもや同じ江戸商人に公認します。大坂の米商人の代表、加嶋屋清兵衛たち 3 名が江戸にのぼって廃止と大坂人による先物売買の公認を陳情をしますが、「寝言はいうな」と、あっさり却下。落ちこんだ 3 人は打ち首覚悟で加賀藩前田公の行列に駕籠訴を決行します。お殿様は 3 人を屋敷に招きいれて酒食でもてなし、運動資金まであたえ励ましたのですからエライ。大坂は大大名加賀藩の後ろ盾を得たのです。

享保 15 年(1730)8 月 13 日、ついに南町奉行大岡越前守忠相の名前で「堂島米会所」は正式に公許されました。米価を大坂商人の自由に任せることで需給調整機能が働く気づいたからで、このとき代表だった加嶋屋というのが現代の大同生命保険(株)さんです。

市場に参加する仲買人は 1,351 人で、米方両替 50 株を清算会社(クリアリングハウス)として許可します。会所(事務所)は堂島船大工町、その西南に消合場(清算場所)。寄り場(立会場)は、参加する者が多いため建物ではなく、大江橋(御堂筋)と西の渡辺橋(四つ橋筋)との間の堂島浜通りを公儀の許可を得て使いました。現在の ANA クラウンプラザホテルの南側、堂島川寄りに稲穂をもった童の像と記念碑が建立されています。

第 35 話 ^{しょうまい}正 米 (現物)、^{ちょうあいまい}帳 合 米 (先物)、^{こくだてまい}石 建 米 (ミニ) まで揃った米総合取引所

公許された堂島米会所の寄り場は東から順に実物取引を行う ^{しょうまい}正 米、先物取引の ^{ちょうあいまい}帳 合 米、それ ^{こくだてまい}に石 建 米というミニ売買(帳合米の 5 分の 1)の 3 市場で構成されていました。

正米市場は米切手の取引で、相対取引ですからどこの産地のコメでも売買できます。百石単位(米切手 10 枚)を「丸物」とよび、それ以下を「端物」といいますが、米切手は質入れや融資の担保になり、藩財政に影響するため不渡りになることはなくて信用度も高い。のちに危険説がでると幕府が米切手を保証し、万一財産没収処分になっても、米切手だけは残った家族に手渡すと約束したので、富豪層は出米(蔵出し)せずに財産としての買持ちしたものです。

帳合米のほうは現物や代金の受渡しはおこなわず、売買を帳簿上で計算して清算することで終わるのですが、価格をつけるのですからどこのおコメかを想定しておかないと混乱します。そこで現代の標準品にあたる^{たてもものまい}「建 物 米 = 建 米」^{だてまい}をあらかじめ定めておきました。

取引期間は現代の複数限月制とは違って 1 年を 3 期に分け(三期商い)、正月の 8 日から 4 月 27 日を第一期春物、5 月 7 日から 10 月 8 日までが第二期夏物、10 月 17 日から 12 月 23 日までを第三期冬物とし、各期で建米が違っていました。どこのものでもいいわけではなく、四蔵米と呼ばれた広島米、中国(周防、長門)米、筑前米、肥後米のほか、取引数量が多く品質の高いものを対象に米仲買たちが投票で決めます。つまり人気投票で、最多札のものを第一と第三期の建米に、第二期夏物だけは原則として加賀米としていました。

建米に選ばれると米屋たちが最高品質を保証していることになり、日本の基準米という名声を博して値段は高く、江戸参勤のときの江戸城での席次もよくなりますから、藩は競って仲買人たちに運動し、選ばれると^{よないぎん}興内銀(謝礼)として銀 500 枚、現代の貨幣価値で約 2,500 万円を会所運営費用に寄付しました。第二期が加賀米なのは、品質よりも江戸で会所設立運動をした際に援助を受けた恩義にむくいるためで、幕末まで変えず、興内銀も受けとろうともしませんでした。

ちなみに産地による価格差はどの程度あったかですが、米価が暴落した享保 15 年(1730)、広島米が 1 石あたり 29 匁 8 分だったのに対して薩摩米は 22 匁 3 分。10 代将軍家治の宝暦 10 年(1760)には、肥後米 55 匁 5 分に対して津米にいたっては 29 匁 5 分と 47%も安いといった具合です。

第 36 話 火縄に点火して燃え尽きたら取引終了です

堂島米会所に参加した 1,351 人の仲買人は、自己の投機だけをおこなう「思惑師」と、主として顧客からの注文を受けて取引をするブローカーとがあり、売値と買値を示してマーケットメイクをする「太刀打ち」とよばれるフロア・トレーダーや、仲買の注文と太刀打ちとの間を取りもって、小銭を稼ぐ「走り坊」という少年たちも寄場をにぎわしていました。

取引は正月 4 日と 5 日は初市として淀屋の屋敷跡で祝儀商いをおこなって淀屋を偲び、8 日から堂島浜で帳合米第一期春物がはじまります。毎朝 5 時(午前 8 時)に会所の事務方である「水役人」が拍子木を打ち、前日最終値段を大声で呼びあげるのを合図に取引がスタートします。値段と数量を手で示して各々相手を求めながら成立させ、値段の流れが変わるたびに係員が立会場全体に知らせました。

朝 4 時(午前 10 時)、取引所理事の「年行司」が帳合米の値段を参考にして正米取引の開始値段(言い合せ値)を市場に発表し、この価格をベースに正米のセリがはじまります。米価は先に開かれている帳合米がリードすることになり、現物と先物の乖離かいりをふせぎ、多数の取引と大勢の予測が集中して公正な価格をうみだし、全国の標準となったのです。

9 時(正午)に取引は一旦終了し、正米取引はこの 2 時間ですべての取引が終わりますが、帳合米は昼休みをはさんで 8 時(午後 2 時)から後場をはじめます。前場は時間ですが、後場は 1 寸余りの火縄に点火し、この火が燃えつきたときに取引終了。そのときの値が「火縄値段」として公式の大引け価格になりました。

売買の終了は水役人が水をまいて告げますが、なおつづくため再度水をまき、2 度目のときに空になった水桶を市場に伏せて置いたことから、その際の値段を「桶伏値段」おけふせとして帳入値段(仮損益の計算値段)につかいます。

帳合米の売買単位は 100 石で、口銭は片道 2 匁 5 分です。当時の米価を 40 匁とすると往復 5 匁は 12.5%ですが、翌日まで持ちこす「夜越米」よごしは別に持ち越し口銭 2 匁 5 分が必要でした。仲買人が米方両替に預ける敷銀(取引証拠金)は丸代金の 1%程度で、委託者から預かる敷銀は各仲買人が定めていました。

限市(満期日＝納会)までに買ったものは売埋め(転売)し、売ったものは買埋め(買い戻し)をして「古米端銀(差金)」こまいはぎんを決済します。帳合米には受渡しはありませんが、例外規定として「正銀正米法」というのがあって、正米と帳合米との値段の差が大きいと判断したときには、建米(標準品)の受渡しをさせることで取組をときほぐすルールにしていました。

第 37 話 堂島米会所から架空実況放送をお送りします

今日は、世界最初のデリバティブマーケット、堂島米会所からの実況中継です。ここ堂島浜通りにあります寄り場(立会い場)は神聖な場所ですから、立会いがはじまると荒縄がはられ、部外者は一切立ち入りできません。大名や奉行所であっても例外ではないのです。ある日のこと、ドロボウが追われてここに逃げこんでしまい、捕り方もなかに入れませんから、まんまと逃げおおせたことがあったそうです。

堂島川からはタクシー代わりの小舟で大勢の人がやってきました。屋形船を岸にもやって、芸者をつれて船のなかから相場を眺める人もいます。仲買人が注文をとりにきますし、煮魚や燗酒を売る小舟も寄ってくるという粋なものですから、うらやましい。多くのお客さまは、このあたりに 500 軒もある仲買店の麻のノレンを次々にくぐっていきました。

浜通りに面した大店では格子窓ごしに市場を眺めながら相場が楽しめますし、茶菓子のもとよりお酒をふるまう店もあります。上客ともなると 2 階に案内され、屋には曾根崎新地の料理屋から弁当が届くのだそうです。

「カーン、カン、カン、カーン」、撃柝(げきたく、拍子木)です。朝 5 つ時(午前 8 時)になりました。「寄りまーす！」と、頭の先からカン高い声をあげているのが会所の水役人で、これから先物取引の「帳合米」がはじまります。仲買人の場立ちや、自己ディーリングをする思惑師、マーケットメイクの太刀打ち(たちうち)など、なにしろ千人もの人が許可を受けていますから、ご覧のように芋の子を洗うようにぎわいです。

船場商人の家訓では目だたぬように地味な服装をするものですが、紺や浅黄縞(あさぎしま)の着物に木綿の股引き(ももひき)、ゆるめに締めた博多帯に白足袋姿と小粋でしょ。おんなものの派手な小袖で蝶のように舞う堂島下駄の男など、新地のおなご衆がほうってはおきません。手をあげて「取ろう！」と叫んでいるのが買いたい人、「遣った！」(や)と怒鳴っているのが売りたい者。頭上にあげた両手は値段と数量をしめして、相手があると掌をパチンとあわせて取引成立です。

浜通りの中央に小さい建物が見えるでしょ。一段高いところにいるのが年行司(理事)で、4 つ時(午前 10 時)になると、帳合米値を参考にして正米取引(しょうまい)の言い合せ(開始値段)を市場に知らせ、正米のセリがはじまります。寄り場は大江橋から西に実物取引の正米、先物取引の帳合米(ちょうあいまい)、ミニ売買(こくだてまい)(帳合米の 5 分の 1)の石建米の 3 市場になっていて、9 つ時(正午)に取引は一旦おわり、帳合米だけが 8 つ時(午後 2 時)から後場がはじまります。後場は 1 寸余りの火縄に点火して、この火が燃えつきたら取引終了。火が消えたらサヨナラだなんて、新地のクラブのお姉さまとどこか似て……。

第 38 話 オランダ商館のシーボルトが堂島米会所をこっそり覗き見していたかも

ノーベル経済学賞のマーティン・ミラー氏は「先物市場は日本で発明された世界最初の先物市場」だと明言していますが、堂島米会所の仕組みは、明治以降の日本市場よりもシカゴ商品取引所(CBOT)のほうが似ていると研究者は指摘しています。平成 17 年にスタートしたクリアリング・ハウス(日本商品清算機構)も、江戸時代の堂島にもシカゴにもありました。セリ方法もグローバル化の時代だからだとザラバ(複数約定値段)に移行していますが、3 百年前の堂島はすべてザラバでした。

CBOTは日本よりも 118 年もあとの誕生ですから、ひょっとすると大坂から仕法が流出した可能性があるのです。残念ながら証拠はありません。誰か伝えた人物がいないかと想像をたくましくすると、「フリップ・F・フォン・シーボルト」の名が浮かんできました。

日本滞在中に、娘・楠本イネ(オランダおイネ)をもうけたことで有名ですが、1796 年生まれのドイツの医師で、オランダ国王の侍医の斡旋で東インド陸軍病院の外科医となり、1823 年 6 月に来日して、唯一開かれていた貿易港の長崎・出島にあるオランダ商館医として 7 年間滞在しています。

先端医学や蘭学に憧れた学者たちが出島に押しかけてきたため、出島の外に鳴滝塾を開設。講義をうけた人脈を通じて日本の探索・研究を進めています。1826 年にはオランダ商館長カピタンの江戸参府に随行し、蝦夷を探索した最上徳内から北方の地図を贈られ、最新の日本地図も手にいれますが、幕府禁製の地図だったため、国外追放処分になってしまいます。

集めた膨大な蒐集品は、一部はヨーロッパ諸国の博物館や宮廷に売られ、故国ドイツのボン大学、ミュンヘン、ウィーンなどに残された資料は、いまでも未整理のものがあるらしいのです。実は、1853 年にアメリカ東インドシナ艦隊を率いて、黒船 4 隻で浦賀に来日するマシュー・ペリーに日本資料を提供したのも彼で、米国との接点がたっぷりあります。

大坂との関係ですが、後に刊行した『日本』に「大坂はこの国第一の商業都市で、見落としてはならないのは米穀の倉庫と大市場、とくに堂島の有名な米穀取引所や北浜の現金取引所、雑魚場の魚市や青物市場」と描いています。

それ以上の詳しい説明はありませんが、蒐集品に米会所を描いた「摂津名所図會」を持ち帰っていますから、シカゴへわたった可能性は否定できないのです。立入禁止の堂島米会所を、柱の陰からこっそり覗き見しているシーボルトなんて、ちょっとした歴史のロマンでしょ。

第 39 話 幕末と維新のはざまに虎市参上！

享保 15 年(1730)に幕府によって公許された堂島米会所は、しょうまい正 米(現物)市場とちょうあいまい帳 合 米(先物)市場、それにこくだてまい石 建 米(ミニ取引)市場の三市場からなりたっていました。

取引量は帳合米が格段に多くて日本の基準米価になっていましたが、嘉永 6 年(1853)にペリー艦隊の 4 隻の黒船が浦賀にあらわれると、尊皇攘夷の嵐が吹いて人の心はコメ相場どころではなくなってしまいます。取引量の減少は流動性の不足になって公正な価格を危うくし、経済機能に支障がでてきました。こまったお米屋さんたちはそれまで脇役にすぎなかった石建米取引に目をつけたのです。

もともとこあきない小商内とよばれ、享保 12 年、幕府が江戸の米商人たちに許可した堂島永来町御用会所ではじまったもので、近くに竹藪があったことから虎市と呼ばれていました。虎市では仲買人や両替商(現在の銀行)がマーケット・メーカーになって売値と買値を提示し、相対で取引を成立させます。反対売買にも機械的に差金決済に応じるという、現代の東京金融取引所の外国為替証拠金取引(FX)とおなじ仕組みで、価格形成能力などありません。売買単位は帳合米の 5 分の 1 の 20 石、帳合米をするには資金が足りない人たちの小口市場でしたから出来高もわずかで、明和 7 年(1770)からは、一日だけで損益を決済するデイトレードだけになって売買は途絶えていたのです。

幕末の混乱で一般顧客の注文がへってしまった帳合米取引の代わりとして、文久 3 年(1863)に取引単位や期間だけ石建米のルールを取り入れた新石建米取引としてスタートさせます。取引単位もさらに半分の 10 石とミニ化を進め、期間も短くしました。

これで売買高はふくらみ人気があつまったのですが、問題がありました。幕末の混乱もあって値動きが激しくなり、一攫千金を夢みて大金を投入する強引な売買が発生したのです。仕手戦にもなって、先物は 1 石あたり 350 匁なのに現物は 420 匁と混迷を深めていきました。平成 19 年、20 年と米国ではガソリンからエタノール用の穀物にまで、ファンドと称した多額の投機資産が流入して価格を混乱させたのとおなじことになったのです。

新政権ににぎったのは長州や薩摩の下級武士たちですから、先物取引の経済機能など知るわけがありません。値動きだけが苦々しく映り、せつかく江戸時代に築かれた金融テクノロジーでしたが、徳川幕府の政策はすべて否定という流れに巻きこまれていったのです。

第 40 話 明治政府が先物は危険だと禁止して、あわてて再開した本当の理由

慶応 3 年の王政復古で世の中はキナ臭くなり、米を現金に換えるための売りがふえてきました。米価は 3 円 70 銭から明治元年の鳥羽伏見の戦いで 2 円 86 銭に急落したのです。

ところが江戸城は無血開城になったものの、戦火は東北・奥羽へとひろがり(戊辰戦争)、産地から品物がとどかなくなると不安心理がはたらいて 7 円 65 銭に急騰してしまいます。あわてた政府は廻米制限などの対策をこじますが、騰勢はおさえきれず、庶民生活を直撃しました。明治 2 年 2 月 22 日に「^{しょうまい}正米売買のほか、^{こくだて}石建並びに^{ちょうあいまい}帳合米(先物)取引の取り組みの儀、今後は禁止」にしてしまうのです。

長州や薩摩の下級武士たちですから、先物を止めると米価は安定すると思ったのでしょう。ところが 2 か月後の 4 月になると 8 円、6 月に 9 円 30 銭、10 月には 10 円 70 銭まで高騰、翌 3 年には 11 円 95 銭という記録的な高値をみせました。それでも、「自然の相場に任せるべし」と間違いを認めません。ところが税収入はまだお米でしたから、米価の不安定は国家財政にとってゆゆしき問題だったのです。

政府は大蔵^{しょうゆう}少輔(補佐官)の井上^{かおる}馨(長州出身で後に工部卿、外務卿、農商務や大蔵大臣など歴任)を大阪に派遣して調査させます。その結果、川口の外人居留地で公然とおこなわれている外人の米定期取引に問題があること。米穀商の磯野小右衛門(後の大阪証券取引所理事長)たちが再開の陳情をしているからという理由で、4 年 4 月に再開を許可します。

米会所は堂島正米会所の名でスタートします。明治 6 年の商社規則で、大阪油相庭^{そうば}会所と合併して「堂島米油相庭会所」になりますが、当時の会員数は 450 人で、頭取には最初の堂島米会所設立に活躍した加嶋屋(現・大同生命保険株)の 9 代目、広岡久衛門さんが就任しました。

その後の明治 9 年に「米商会所条例」が布告され、半官半民から民間営利会社の「大阪堂島米商会所」になります。運営は自由経済主義を取りいれ、競争原理の導入をはかりますが、堂島だけではなく、東京などの地方都市にも多くの商会所が設立されていきました。

明治 26 年の取引所法(商品と証券はおなじ法律です)の公布で、「株式会社大阪堂島米穀取引所」に生まれ変わりますが、残念なことに第二次世界大戦が近づいて物価は統制され、米穀配給統制法公布などで、昭和 14 年におコメの先物取引所は歴史の幕を閉じることになったのです。

－ 著者からのメッセージ －

今昔物語「堂島ショート・ショート」、楽しんでいただけましたか。おさまりきれなかった浪速の話や、システムの秘密、相場の魅力や儲け方など、ドキドキするものがたっぷりありますが、つづきは次の機会といたします。

平成 21 年の初春、中之島公会堂で「淀屋が結ぶ大阪と鳥取のきずな」フォーラムが開催されました。江戸時代の初めころまで砂地の中州にすぎなかった中之島を大地によりみがえらせて、「天満青物市場」「^{ざこば}雑喉場魚市」「淀屋米市」など天下の台所をつくりあげた淀屋ですが、5代目の淀屋辰五郎（^{こうとう}広当）の時代に財産没収、闕所・所払いになりました。ところがその後も鳥取県倉吉市で分家がのれんを守り、淀屋を再興したというのです。

倉吉の大蓮寺には「大坂の特権商人淀屋の墓所」の碑がたち、多数の淀屋の墓が並んでいて、フォーラムには橋下大阪府知事と平井鳥取県知事がパネラーとして出席。作家の堺屋太一さんが淀屋の革新性などをテーマに講演がありました。その淀屋が心血をそそいだ淀屋米市から約 350 年、堂島米会所から数えても 275 年ほどの歴史をもつ浪速の取引所ですが、恐いことにその灯が消えてしまいそうなのです。

現在、日本の商品先物取引所は、東京に2つ、名古屋に1つ、そして大阪には関西商品取引所が、辛くも堂島の灯を担っているのですが、シェア(売買高占有率)が0.3%と小さく、経済活力が極端に低くなった大阪には必要がないだろうという話までがでています。

商品取引所のシステムは、上場商品を取り扱う物流機能であり、経済社会を円滑にする需給調整機能や価格の平準化作用、なによりも公正な価格の形成機能が基本です。それらを有効にする流動性は多くの投資家の参加で成り立っていて、生産者でも流通業者でもない、多数の無名人(消費者)のさまざまな意見(投機)が積み重なってはじめて、大方の方々に認められる価格が生みだされます。

投機はこのような重要な役割をはたしていますが、昔から関西は理財に明るい庶民の町で、こんなことは子どものころから知っていました。だからこそ世界で最初の先物取引所として、堂島のコメ取引を生みだすことができたのです。

大阪の歴史博物館には、堂島米市の大きなジオラマが展示され、投資家も登場、賑やかに売買をしている姿は今にも動き出しそうですし、市立海洋博物館「なにわの海の時空館(南港)」では、先物取引のヘッジ機能や仕組みの説明がビデオで流れていますが、東京都墨田区の「江戸東京博物館」には、広い館内のどこにも先物取引の展示などありません。

これだけで先物文化は関西だけなんて、言いすぎかもしれませんが、商品以外にも東京と大阪の証券取引所が証券先物を上場していて、取引量は一方的に大阪が勝っています。東京はストックの町で、関西はデリバティブ取引の町だという声も小さくはありません。実際の取引には北海道から沖縄まで広

範囲にわたる人たちが参加していますが、堂島米会所、日経 225 など、その歴史、伝統、文化・風土、実績からアジア・世界にとっても、東京と並んで関西には意義のある総合的な先物・金融センターとなりうる遺伝子と場所の力を秘めているのです。

現代の出来高減少は、サブプライムローンに端を発した未曾有の不況のせいだけではありません。ご存じのようにコンプライアンスの遵守など先物取引の勧誘行為に問題があって、まじめに取り組んできた受託会社も思わぬ影響をうけ、取扱高も営業マンの数も3分の1にまで減ってしまったのが主因です。しかし、不良会社と名指しされた会社はステージから退場しましたし、クレームも大きく減少して安心して取引を委託できるようになりました。

取引所は円滑に取引が成立できるインフラの提供が責務ですから、大型商品コメ上場申請への一環として、「関西商取コメ指数(KRI)」を公表し、啓蒙に取り組んでいます。なにしろ投機の魅力がたっぷりあるのですから、関西経済活性化のためにも、大阪に受け継がれてきた先物文化を、みなさんの手で支えていただきたいものです。

島 実蔵